

共八

文部省著作

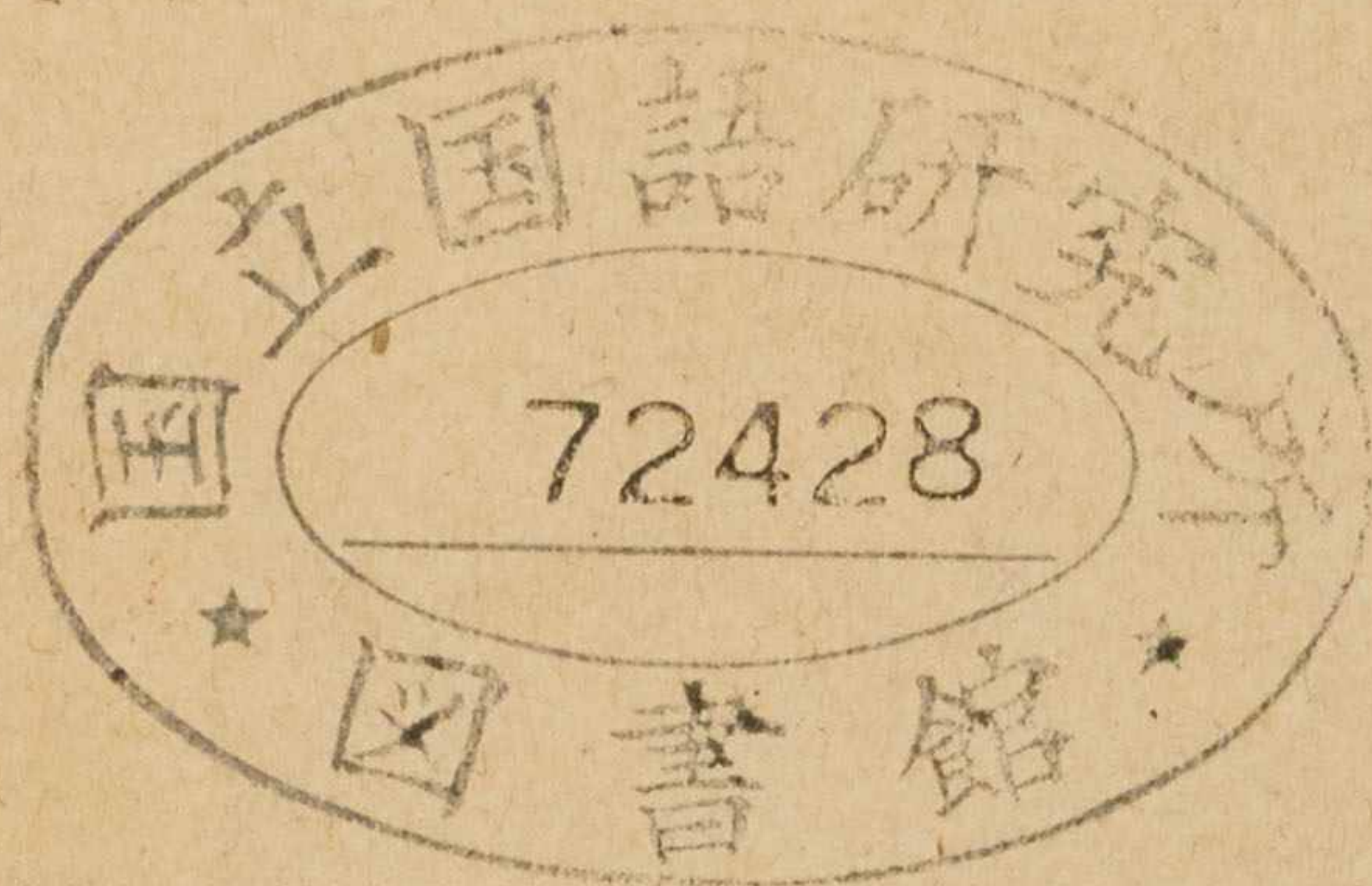
高等小學讀本一

發賣所

株式會社
國定教科書共同販賣所

K14

Mo

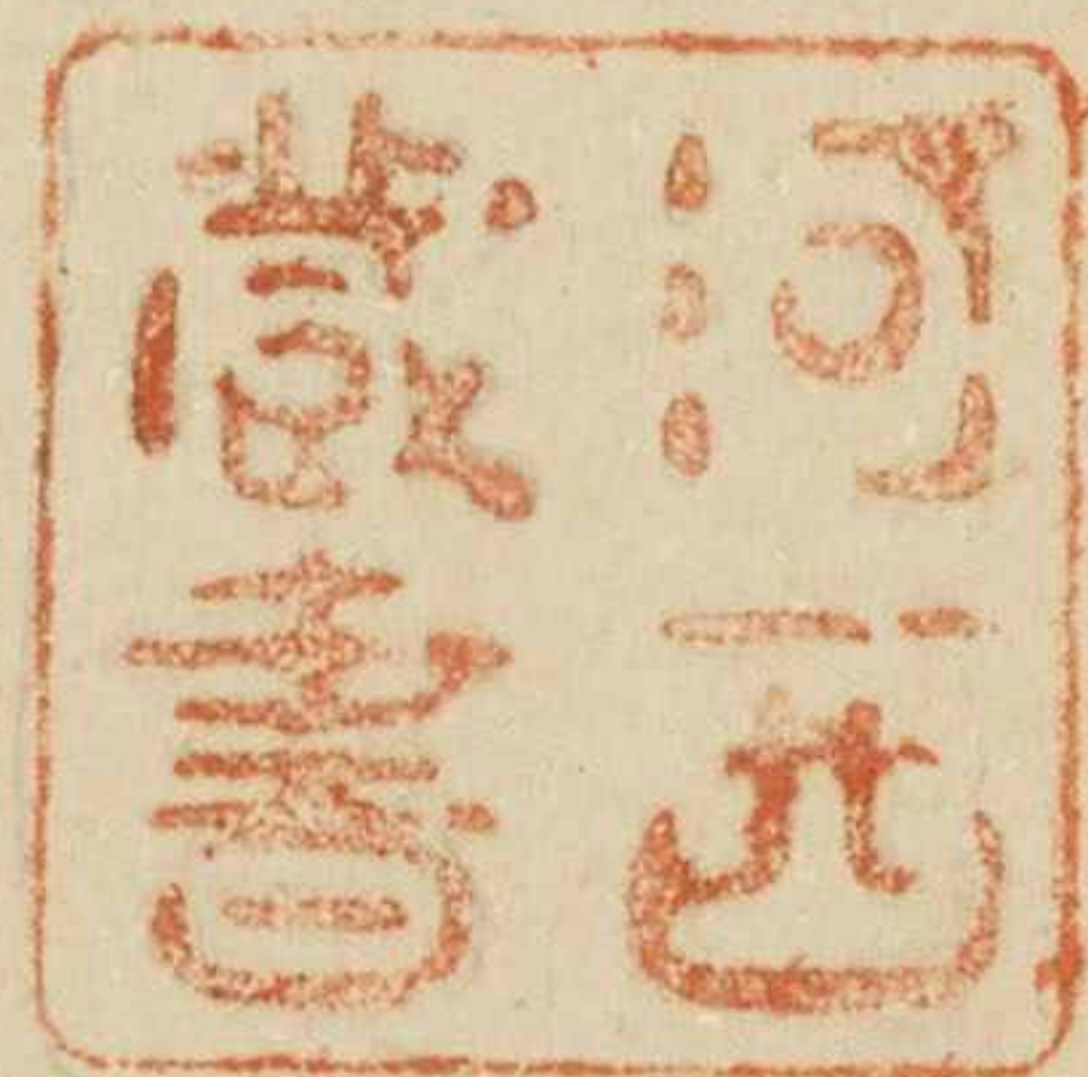


文部省著作

高等小學讀本
一

 發行所

株式會社 國定教科書共同販賣所



目録

第一課	因幡の兎	(一)	一	第十一課	じょーじすちぶんそん	(二)	三十八
第二課	因幡の兎	(二)	四	第十二課	日本武尊の川上梟帥征伐		四十二
第三課	春の景色		七	第十三課	足尾銅山		四十六
第四課	靖國神社		十	第十四課	地中の話		五十
第五課	感心な母	(一)	十三	第十五課	夏やすみ		五十四
第六課	感心な母	(二)	十六	第十六課	草香幡梭姫皇后		五十六
第七課	毒アル植物		二十	第十七課	瓜生岩		五十九
第八課	箱根山		二十五	第十八課	富士登山	(一)	六十四
第九課	昔の旅行		二十九	第十九課	富士登山	(二)	六十七
第十課	じょーじすちぶんそん	(一)	三十五	第二十課	運動		七十一

第一課 因幡の兎 (一)

勇氣

天照大神の御をひに、大國主命と申す御方がござ
いきました。勇氣があつて、またあはれみぶかい御方で
ございきました。

後

この大國主命がある日、兄様たちのおともをして、
因幡の國へ行かれました。命は重い袋をせおつてを
られますので、つい道が後れて、ひとりうみべを通
て行かれますと、毛のぬけてゐる兎が一匹、しくし
くと泣いてをります。

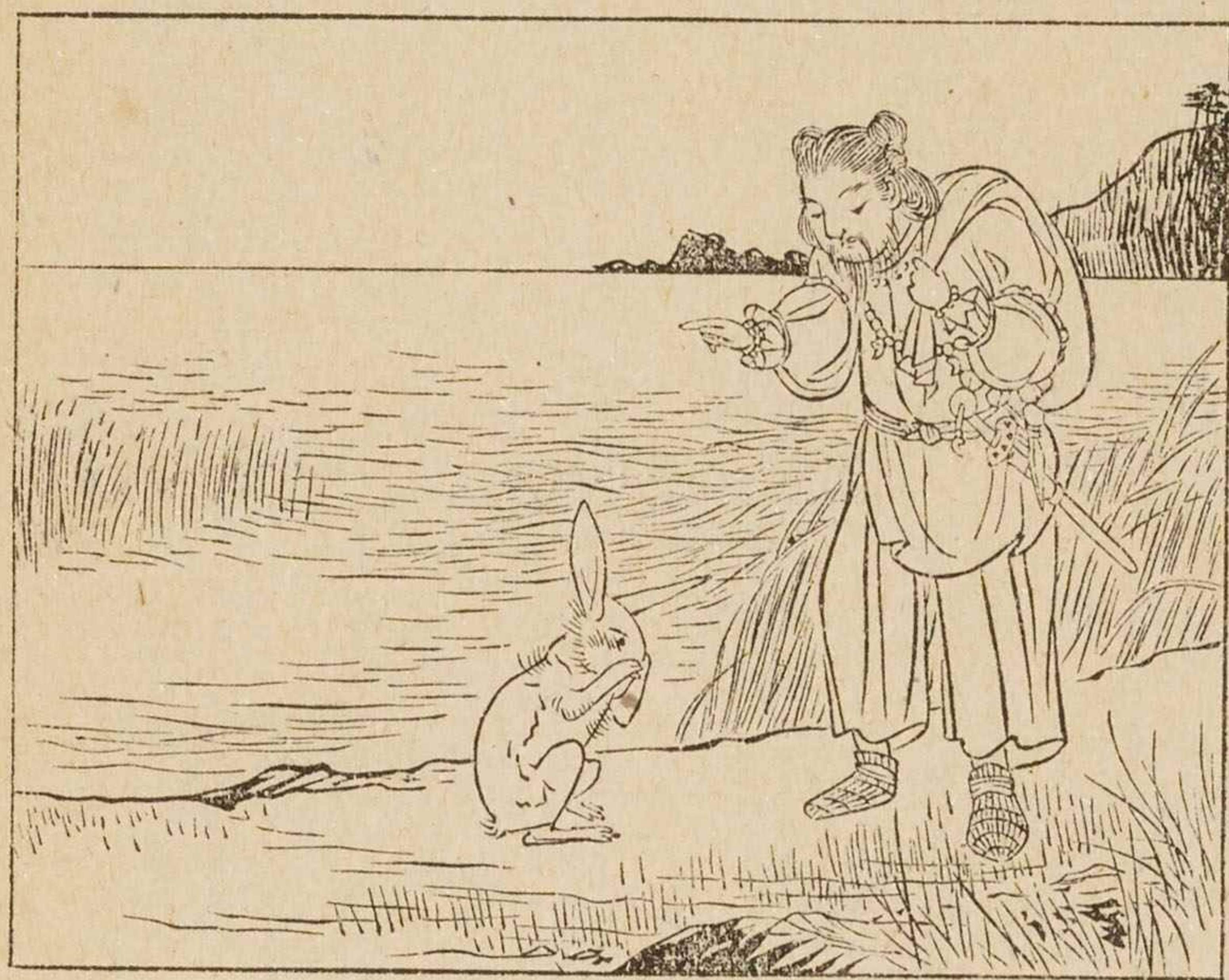
命は、これを見つけて、かはいさうだ。と思つて、

「おまつはなぜそんなに泣いてをるのか。」
とおたづねになりました。

すると、兔は、目をこすって、

「私は隱岐の島のうまれでございませう。つねづねこの國へ渡って来たい。」と思つてをりました。だが、よいてだてがございませんでした。

そこである日、海のわにがめをだまして、「おまつと私とどつ



ちがなかまが多いか、ひとつくくらべてみようでは
ないか。』と申しますと、わにざめは、すぐに、承知
して、なかまをおほぜい、つれて来ました。

『まづ、おまへたちは、ここからむかふの岬^{みさき}まで、な
らんでみよ。私は、その上を歩きながら、數をしら
べよう。』と申しますと、わにざめは、すぐに、そのと
ほりに、ならびました。

そこで、私は、その上を渡って来て、いま一足で、この
國に着かうとするところで、『おまへたちは、私に、
うまく、だまされたな。』と、いって、笑ってやりました。

笑

ると、いちばんをはりに、をたわにぎめがたいそ
し、おこつて、このとほりに、私の毛をむしり取つてし
まひました。」

第二課 因幡の兎 (二)

兎うさぎは、なほ、ことばをつづけて、

「私は、しかたがありませんから、砂の上に、ねてを
りますと、そこを、神様たちがお通りになつて、『おい。
兎うさぎ。そんな所に、ねてをらずに、この、きれいな、海の
水をあびて、あの、風かぜ通とほしのよい山の上に、ねてを
れ。さうすると、すぐに、なほる。』と教つてください

神

ました。

私は『よいことを聞いた。』と思つて、そのとほりにして、風に吹かれてをりますと、海の水がかあくにつれて、からだだが、たいそし、痛くなつてきました。それで、こんな泣いてをるのでございます。』

と答へました。

命みことは、兄様たちがそんなことをお教へなされたのだな。』と思つて、

『さうか。それはきのどくだ。さぞ、痛いだらう。早く、川口へ、行つて、からだを洗へ。そして、がまのほを取つ

洗

吹痛

て、それをしいて、その上に、ねてをれ。さうすると、
きつとなほる。」

と、ていねいにお教へになりました。

そこで、兎うさぎが、そのとほりに、しますと、からだがすっか
り、もとのよーになりました。

兎うさぎは、たいそー、喜んで、お礼に来て、

「おかげさまで、からだが、すっか、なほりました。あ
なたは、今こそ、兄様たちのおともになつてをられ
ますが、いまに、きつとり、っぱな神様におなりになる
でございませう。」

と申しました。

その後、大國主命は、あるものをほろぼして、兎うさぎの申したとほりに、えらい御方になられました。出いづ雲ものおほ大社やしるといふのはこの御方をまつた御社でございませす。

第三課 春の景色けしき。

散歩

ある日、私は、村はづれに、散歩に出ました。

その日は、だいそー、天氣のよい日で、空は、青青として、すこしの雲もなく、遠い山は、霞かすみがかかって、ほんのりと、見えてをりました。

菜

麥畑と菜の花畑とが入りまじってをるのや、みちばたの草の中に、すみれやれんげそーやたんぽぽなど、がさいてをるのは、ちよーど、いちめんにもーせんとをしいたよーでございました。

小山の上や下に、櫻の花や桃の花のさいてをるのは、ちよーど、雲のかりたよーでございました。

小川の水は、さらさらと流れてをり、岸の柳は、そよそよと吹く風になびいてをりました。

ひばりは、空でさつづつてをり、ちよーちは、花の上でまつてをりました。

柳

唱歌

農夫は田をすいたり、畑をうったりして、働いてをり、
子どもは摘草つみくさをしたり、唱歌を歌ったりして、遊んで
をりました。

春は、たいそし、景色けしきがよくて、時候も暑くなく、寒く
なく、まことに、こころもちのよい時でございます
から、人は、花見に、出たり、摘草つみくさをしたり、また、學校で
は、遠足などをするのでございます。

すみれつみつつ、 歸り行く、

春のゆふべの 村の道。

ともなひ来る 蝶ちよー二つ、

來

先

あるひは、先に、
また、後に。」

手に持つ花を
したひ来る

蝶ちよの心の
愛らしき。

いざ。来て遊べ、
もろともに。

櫻さかりの
わが庭に。」

第四課 靖國神社。

靖國神社ハ、東京市九段坂ノ上ニアリ。オモニ、明治
維新後、ワガ國ノタメニ、戦死セル人々ヲマツレル
社ナリ。カノ明治二十七八年戦役、明治三十三年清
國事變ナドニ、戦死セル軍人モ、マタ、ココニ、マツラ

國事變ナトニ戰死セハ軍人モマタニニマツテ

神社

レタリ。

コノ神社ハ、明治二年ニ、タテ

ラレタルモノニシテ、ハジメ

ハ、招魂社ト稱シタリシガ、明

治十二年、別格官幣社ニ列セ

ラレテ、アラタニ、靖國神社ノ

號ヲタマハリタルナリ。ソレ

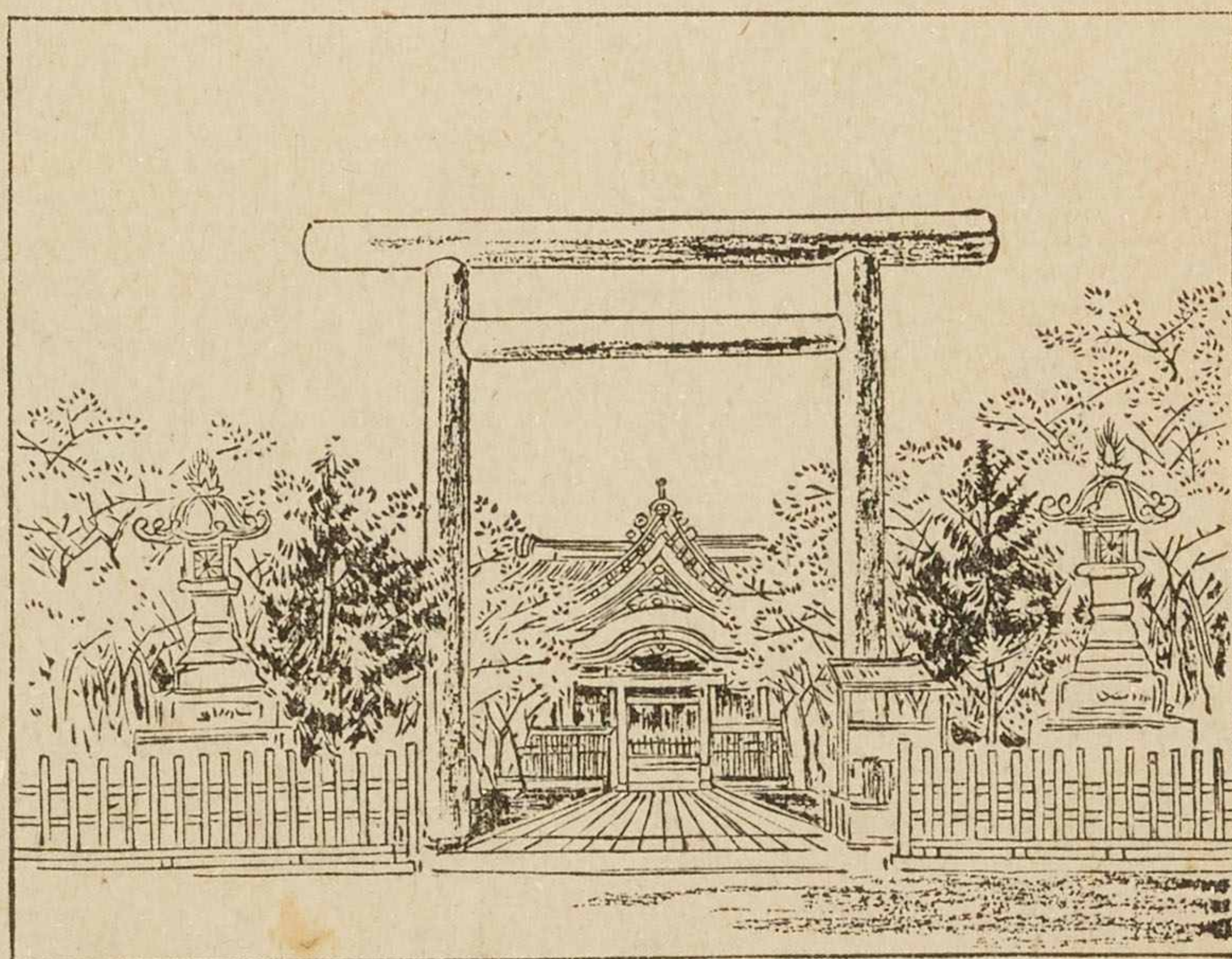
大祭

ヨリ、毎年、五月ト十一月トニ、大祭ヲ行ヒ、ソノ大祭

ニハ、ツネニ、勅使ヲタテテ、幣帛ヲタマフ。

公園

コノ神社ノ境内ハ公園ニシテ、築山、泉水ナドアリ。



高讀一

高讀一

マタ、梅、櫻ナド、多久、植エタレバ、花時ノナガメ、コト
ニ、ヨシ。

鳥居^{トリ}ノ前^{マヘ}ノ廣^{ヒロ}キ庭^{ニハ}ニハ、石燈籠^{イシドウロウ}リ、カハニ、ナラビ、
中^{ナカ}ホドニ、大村益次郎^{オホムラマスジロウ}ノ銅像^{ドウゾウ}アリ。大村益次郎^{オホムラマスジロウ}ハ、明
治維新^{イシニシン}ノコロ、兵事^{ヘイジ}ニ、功勞^{コウロウ}多カリシ人ナリ。

功 器

神社^{シンジャ}ノ左^サニハ、大イナル、煉瓦^{レンカ}造^{ツクリ}ノ建物^{タテモノ}アリ。遊就館^{ユウシュカン}
トイフ。古今^{コキン}ノ兵器^{ヘイキ}ナドヲ陳列^{チンレツ}セル所^{トコロ}ナリ。カノ明
治^{テイ}二十七八年^{ニシチハチトシ}戰役^{センエキ}、明治三十三年^{メイジニシチヨウサツサンネン}清國事變^{シンコクコトシハレン}ナドニ、
ブンドリシタル兵器^{ヘイキ}ナドモ、多久^{トキ}ココニ、陳列^{チンレツ}セラ
レタリ。

第五課 感心を母。(一)

明治二十七年八月、わが軍艦高千穂は吉野浪速の
 二艦とともに、韓國の仁川といふ所の近所に、とま
 て、かはるがはる、清國の軍艦の居所をさがしてお
 た。けれども、清國の軍艦はどこにかくれたものか、
 かげも形も見せん。わが軍人は、たいそ、たいいくつ
 してゐた。
 ある日、軍艦高千穂のある大尉が藥劑室のそばを
 通ると、若い水兵が、女の書いたらしい手紙を膝に
 置いて、ひとりめそめそと、泣いてゐた。

若

妻

大尉^{たいい}は「めめしい男だ。」と思つて、

「おまへは、なぜ泣くのだ。命がをしくなつたのか。妻
子がこひしくなつたのか。おまへも日本男子では
ないか。そんなめめしいことで、どうなるものか。」
と、しかりつけた。

水兵は、おどろいて、立ちあがって、しばらく、大尉^{たいい}を見
つめてゐたが、頭をさげて、

「それは、あんまりなおことです。私は、妻もあり
ません。子もありません。私も日本男子です。なん
で、命を惜みませう。どうぞ、この手紙を見てくだ

惜

さい。」

といて、その手紙をさし出した。大尉たいいはそれを取って、見た。その手紙は字もまづく、文も、ところどころ、わかりかねる所があったが、だいたい、次のよゝな事が書いてあった。

聞けば、おまつは、豊島ほうとうの戦にも、出ず、また、威海衛かいゑいの港口を撃つたときにも、べつだん、てがらをたてなかつたさうな。『さて、さて、ふがひないことだ。』と、母は、残念に、思つておます。おまつは、何のため、に、戦争に、出たのですか。命をすてて、天皇陛下に、つくす

ためではありませんか。

村の人たちは、朝晩、たづねてくださって、『たったひとりのむすこさんが、戦争に、出られて、さぞ、こころぼそいでせう。おるすの間、不自由なことは、なんでも、えんりよなく、おしやるがよい。』と、しんせつに、いてくださいます。母は、その人たちを見るたびに、おまへのふがひないことを思ひ出して、胸むねもはりさけるよーです。おまへも、ちつとは、母の心をさっしてくれるがよい。』

第六課 感心を母。(二)

涙

大尉^{たいい}は、これを読^よんで、思はず、涙をおとした。しばらくして、水兵の手を取り、せなかをなでて、

「あー。ゆるせ。あたしがあるか。おまへはよい母をもつてゐる。たぶん、おまへはよい家柄^{いへがら}に、生れたものだらうな。」

と、いった。

水兵は、頭をふつて、

「いえ。私は鹿兒島^{かごしま}のうみばたのりよしの子です。父は早く死んで、うちには母ばかりのことでおまへですが、その母から『ふがひない。』とまでいはれるか

と思ふと、くやしくてたまりません。』
といた。

大尉^{たい}は、それをなぐさめて、

「おまへのくやしがるのも無理はない。しかし、今の戦争は、昔の戦争とはちがって、ひとりで進んで、てがらをたてるよーなことはできない。せひ、士官と兵卒とひとつになって、働かなければならぬ。それだから、兵卒は兵卒のよーに、上官の命令^{めいれい}を守って、じぶんの職務^{しよくむ}にせいだすのがなによりだ。おまへの母は『命をすてて、天皇陛下に、つくせ。』

卒

理

愉快

といておるけれども、まだ、そのをりにあはない
 のだから、しかたがないではないか。あの豊島ほうとうの
 戦にであはなかつたことは、誰も遺憾いに思つておる。
 しかし、これも、しかたがない。

そのうちには、愉快な戦争もあるだらう。その時
 には、おたがひに、いっしょけんめいに働いて、あが
 高千穂たかちほの名をあらはさう。このあけを、よく、母に
 いてやつて、安心させるがよい。」
 といて聞かせた。

水兵は、頭をさげて、聞いておたが、やがて、敬礼をし

て、にっこりと笑ってたち去った。

第七課 毒^{ドク}アル植物。

アル日、小太郎が父ニツレテ、野原ヲ散歩シタルニ、ミチバタニ、次ノ^ユ畫ノゴトキ植物ノ花サキキ



タリ。ソノ花ハ、金色ニシテ、ハナハダ、^{ビレイ}美麗ナリケレバ、小太郎ハ、カケヨリテ、コレヲ折リ取ラントセリ。父ハ、アワタダシク、ソレヲトドメテ、

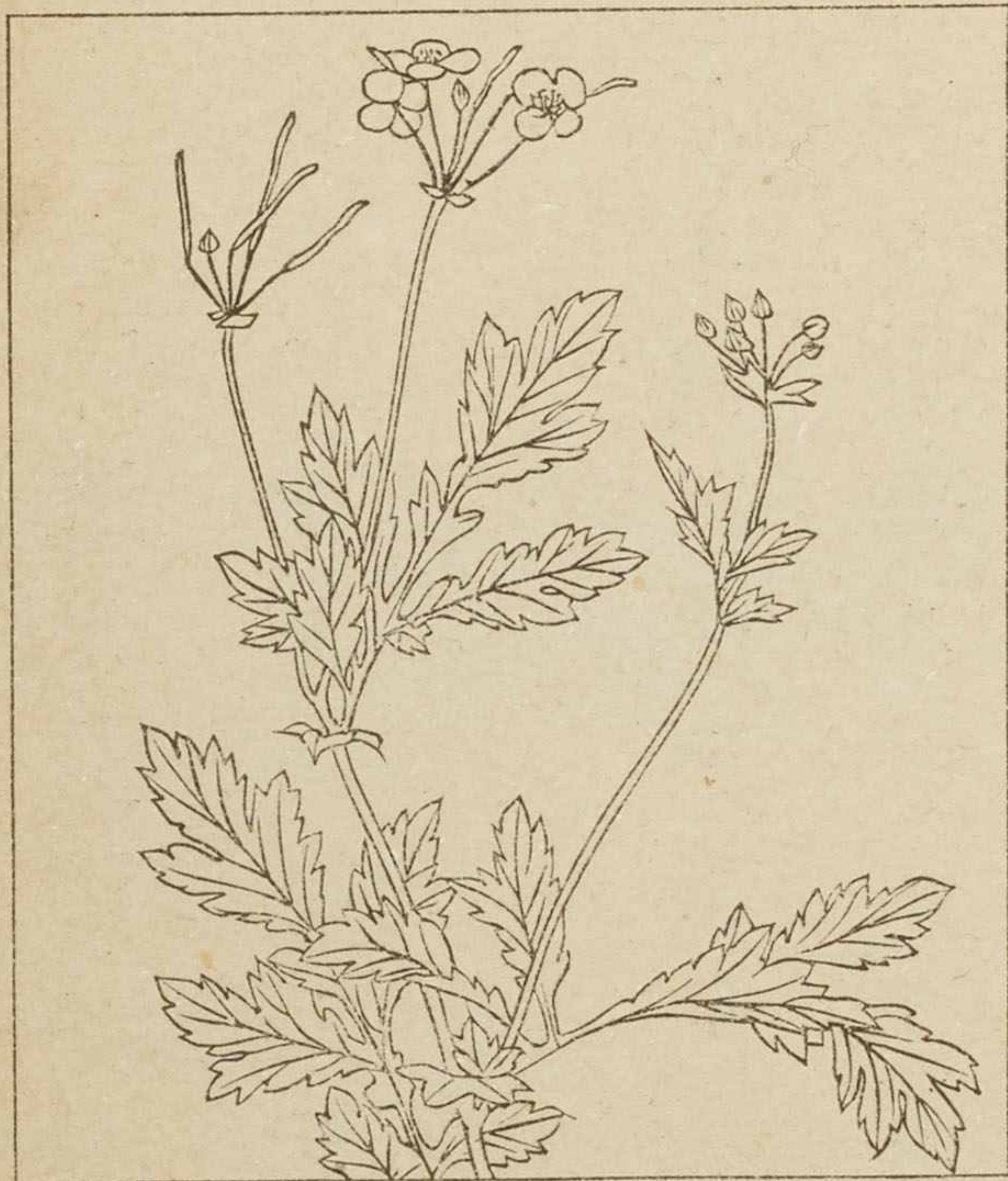
毒

ア。小太郎ヨ。ソレハキンポーゲトイヒテ、ハナ
ハダ、毒アル草ナリ。折リ取ルコトナカレ。」

トイヒタリ。小太郎ハ、オドロキテ、タダチニ、折リ取
ルコトヲヤメタリ。

父ハ、マタ、ムカフニ、次ノ畫ノゴトキ植物ノアルヲ
ユビザシテ、

「見ヨ。ムカフニモ、黄色ノ
花ノサケル草アリ。アレ
ハクサノオートイフモ
ノナリ。アノ草ノ莖、マタ



黄

注意

種

ハ、葉ニ、傷ツクレバ、赤黒キ色ノ汁流れ出ツベシ。
アレモ、マタ、ハナハダ、毒アルモノナレバ、ケツシテ、
折リ取ルコトナカレ。

スベテ、草ノ莖クキ、マタハ、葉ナドニ、傷ツケテ、黄色、赤
黒キ色、マタハ、白キ色ノ汁流れ出ヅルモノ、マタ
ハ、莖クキ、葉ナドノ臭クサキモノノ中ニハ、毒アルモノ多
シ。注意セザルベカラズ。

トイヒ聞カセタリ。

カクテ、シバラク、行キテ、二人ハ、アルタンボミチニ、
出デタリ。ミチバタノ溝ミヅニハ、次ノ畫ノゴトキ、二種

高讀一

高讀一

出テタリミチハタノ清ニハ言ハニニ
二和

高讀一

高讀一



父ハ、

シカリ。キンポーゲノ類^{ルイ}ニシテ、キツネノボタン
トイフモノト、タガラシトイフモノトノ二種ナ

ノ、植物ノ花、マタ、サキ辛タ
リ。
小太郎ハ、メバヤクソレヲ
見ツケテ、
「父ヨ。コレラノ草モキン
ポーゲノ類^{ルイ}ナリヤ。」
ト問ヒタリ。

リ。イヅレモ、マタ、毒アル草ナリ。

サテ、ケフハ、フシギニモ、毒アルモノノミ、目ニア
タリタリ。サレド、見ヨ。ムカフノ沼ヌマニハ、アヤメノ
花サケリ。折リ取りテ、與フベシ。母上へノ土ミヤゲ産ニ
セヨ。

トイヒテ、ソレヲ、折リ取りテ、與ヘタレバ、小太郎ハ
大イニ、喜ビタリ。

カクテ、二人ハ、家へ、歸リシガ、歸ルミチニテ、父ハ、小
太郎ニ、多クノ毒アル植物ノ中ニハ、藥トシテ、ソレ
ゾレ、ツカヒミチノアルモノモアルコトナド話シ

藥

聞カセタリ。

第八課 箱根山。

箱根山トハ相模ノ國ノ西部富士山ノ東南ニアル、
一ムレノ山ヲイフ。ソノウチニ神山、駒岳、二子山ナ
ドアリ。イツレモ昔ハ噴火シタリシモノナリトイ
フ。今モ、神山ノ山腹ニハ大涌谷、マタハ、大地獄トイ
ヒテ、硫黄ノ煙ヲハキ出セル所アリ。

温泉

箱根山中ニハ、温泉多シ。ソノウチ、湯本、塔澤、宮下、堂
島、底倉、木賀、蘆湯ナドハ、昔ヨリ、世ニ知ラレタリ。ア
タリ、シヅカニシテ、空氣清久、景色、マタ、ヨケレバ、浴

清

山

客^{カク}年中、夕エズ。夏ハ、コトニ、多シ。

山上ニハ、蘆^{アシノ}湖^{ウミ}アリ。太^{ダイ}古^コハ、噴^{フン}火^カ口^コナリキトイフ。マ

ハリノ山山、コトゴトク、ソノカゲヲウツシ、富^フ士^ジ山^{サン}、

マタ、ソノカゲヲウツスコトアリテ、景^ケ色^{シキ}、ハナハダ、

ヨシ。

湖

湖ノ北ヨリ、流レ出ヅル川ヲ早^{ハヤ}川^{カハ}トイフ。前ニ、ノベ

半島

タル温泉ハ、タイテイ、ソノ兩^{リョウ}岸^{ガン}ニ、アリ。湖ノ中ニ、半

島アリ。塔^{トウ}島^{ガシマ}トイフ。イマ、離^リ宮^{キョ}ノアル所ナリ。離^リ宮^{キョ}ノ

西方ニハ、關^{セキ}所^{シヨ}ノアトアリ。徳^{トク}川^{ガハ}時代ニ、役人ノ旅人

ヲアラタメタル所ナリ。

箱根山ハ、上下、才ヨソ、八里アリテ、道ハナハダ、ケハ

ヲアラタメタル所ナリ。

道

困難

當

箱根山ハ、上下、オヨソ、八里アリテ、道ハナハダ、ケハシケレド、昔、東海道ヲ往來スルニハ、カナラズ、コエザルベカラザル要路ナリキ。サレバ、旅人ハ、ココヲコユルニ、大イニ、困難セシガ、明治二十二年、東海道鐵道ノ通ジテヨリ、コレヲ上下スル必要ナク、車中ニ安坐シナガラ、タチマチ、スギ去ルコトヲウルニイタレリ。

當地に、まゐり候てより病氣も、しだいに、かるくなり、食も、よほど、すすみ候。このよゝすにては、いま一週間も、

留守

たち候はば、全快すべしと存候。御安心なされ度候。私留守中は、日日、學校へ、かよひ、うちに、居るときには、おぢい様やおばあ様、母上などの仰を守りよし、こころがけられ度候。いづれ、全快の上、歸宅し、いろ、いろ、當地のめづらしきことなども話すべく候。

六月二日

父より

松吉どの

父上様には、だんだん、御病氣もおな

歸宅

ほりなされて、近いうちに、お歸りな

父上様には、だんだん御病氣もおな

ほりなされて、近いうちにお歸りな
されるとのこと。みんなたいそし、喜
んでをります。仰のことは、日日よく、
こころがけてをります。どうぞ、御安
心下さいませ。一日も早く、御歸りな
されて、いろいろ、めづらしいお話を
してくださるのを待ってをります。

六月五日

松吉

父上様

第九課 昔の旅行。

松吉の父は、しばらく、箱根温泉に、とーじに、行つておたが、ほどなく病氣がなほつて、歸つて來た。ある夜、箱根山の有様を話したあとで、昔の人が東海道を旅行したときの有様をも話した。

徳川時代に、東海道といつたのは、京都から近江伊勢などといふ國を通つて、江戸に、行くまでの間のかいどーのことで、その間が、およそ、百三十里ばかり、あつた。そして、その間には、五十三次といつて、宿屋などのある、おもな驛が、五十三ほど、あつた。京都の方から江戸の方へ、旅行したり、江戸の方から

京都の方へ、旅行したりする人は、みんな、その驛

の方から江戸の方へ旅行したり、江戸の方から

高讀一

京都の方へ旅行したりする人は、みんなその驛えきに、休んだり、とまったりして、十日あまりもかかって、やうやう、江戸えどなり、京都なりに着くことができ

るのであった。

そして、その旅行する間にも、いろいろ、難儀なことがあった。

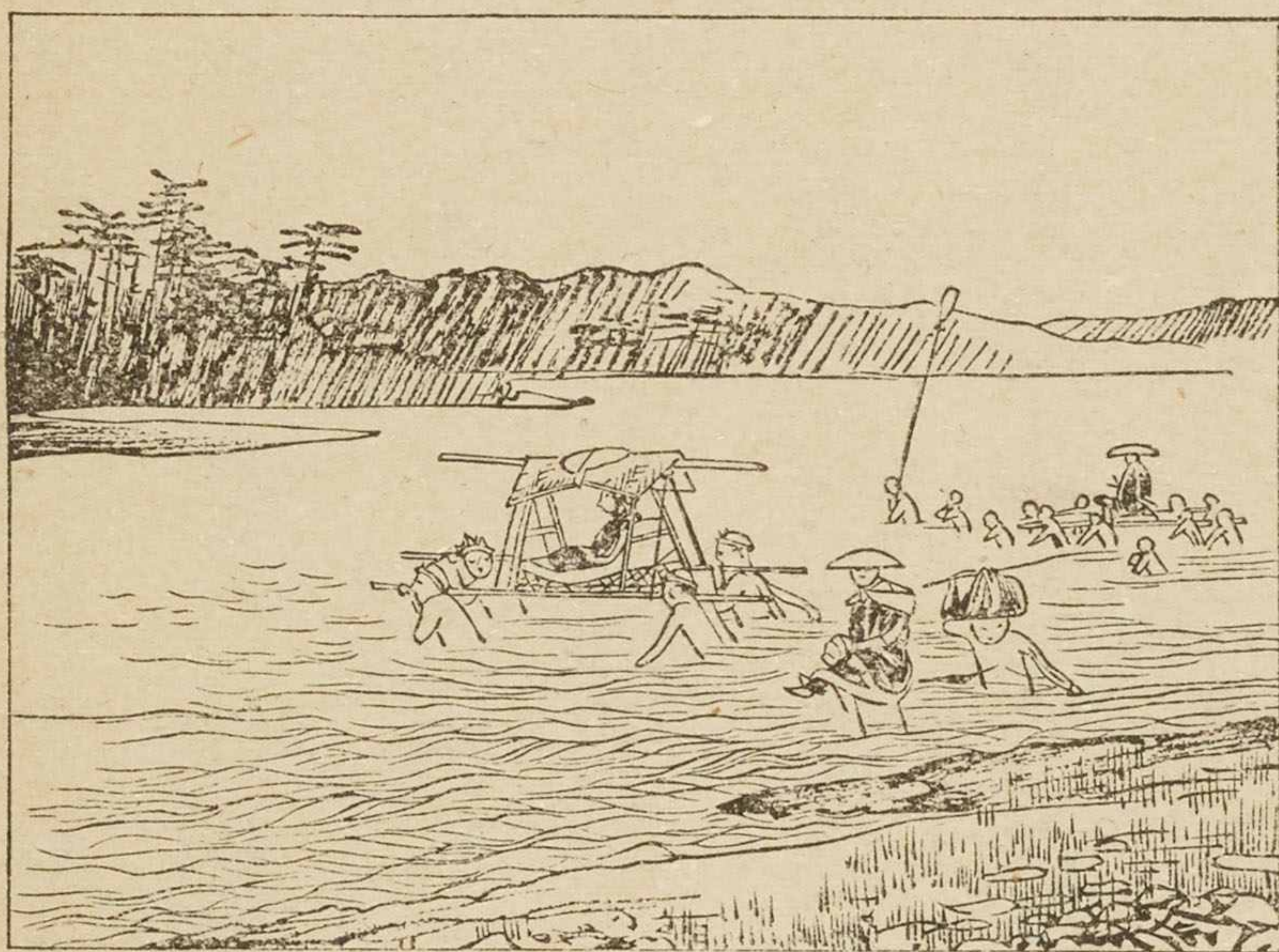
あの、上下八里もある箱根山

も越えなければならず、また、

天龍川てんりゅうがは、大井川おほいのがは、富士川ふじがは、六郷川むくがは

などといふ川も、そのころは、

越



肩

まだ、橋がかけてなかったのて、人の肩車に乗ったり、
れんだいや舟に乗ったりして、渡らなければなら
なかつた。

また、あの箱根などには、せき關所しよがあつて、役人がいち
いち、旅行する人をあらためておた。そして、もし、
そのせき關所しよをよけて、おき道を通るよーなものが
あると、せき關所しよ破やぶりといつて、はりつけにするのであつた。
しかし、こんな時代にも、かごとといふものがあるて、
足の弱いものなどは、それに乗るもしたたが、まだ、
けい警察署しよなどといふものもなかつた時のことだか

途中

ら、かごかきが、途中でかごとをとめて、客に錢をね

警察署などといふものもなかつた時のことだが

高讀一

途中

ら、かごかきが途中でかごとめて、客に錢をねだるよゝなこと、たびたびあつた。またおひはぎやごまのはひなども、おほぜい、をって、人をおどしたり、だましたりして、錢や荷物をとるよゝなこと、ともたびたびあつた。

それで、旅行する人の中には、うちを出る時に「またと、顔を見ることのできないかも知れない」といって、うちじゅうのもの、とみづさかづきを、するものもあつたといふことだ。

ところが、今はどうだ。道は平になり、橋はかかり、

關所せきしよなどであらためられることもなければ、お
 ひはぎやごまのはひなどにあふこともない。そ
 れに、鐵道が通じてゐるから、わづか、十三四時間
 もかかれば、京都から東京へなり、東京から京都
 へなり、行くことができる。

いや。東海道ばかりではない。たいていの所には、
 鐵道が通じてをる。通じてをらない所にでも、馬
 車や人力車があるから、わづかな錢、わづかな日
 數で、やすやすと旅行することができるとおもへ
 たちは、ほんといふ時代に生れたものだ。」

馬車
人力車

高讀一
高讀一

第十課 じよーじすちぶんそん。

たちはほんとしによい時代は生れたものた

高讀一
高讀一

第十課 じょーじすちぶんそん。(一)

日本に、鐵道の通じたのは、明治五年に、東京市と横濱市との間に、通じたのが、いちばん、はじめである。それから、おひおひ、諸方に、通じて、今では、遠方へ行くにも、汽車に乗れば、はやくて、便利で、昔のおそくて、不便であつたことなどは、汽車の中の笑話になつてゐる。

工夫

さて、かういふ、便利な鐵道を、はじめ、工夫したのは、じょーじすちぶんそんといふ人である。この人は、いぎりすの人で、今から、百二十年ほど前に、生れた

人である。

すちぶんそんの父は、ある石炭坑せきたんの火夫であつて、ご



く、あづかな給金きゅうきんをもらつて、やうやううちじゆーじゆーのものを養つてゐた。かういふ有様であつたので、すちぶんそんは、學校にはいつて、勉強する

勉強

ことができなかつた。しかし、からだもじよーぶじよーぶできしよーも強い人であつたから、つらいことや、難儀なことに、よあるよーなことはなかつた。

すちぶんそんは、九歳のころから、ある牧場ぼくじやうの番人

によあるよーなことはなかつた

高讀一
高讀二

夜

すちぶんそんは、九歳のころからある牧場の番人
に、やとはれて、賃錢をもらつておたが、その後、父のや
とはれておる石炭坑せきたんにやとはれた。そして、晝は、じ
ぶんの、受持の仕事に、せいを出し、夜は、夜學校に行
て、讀書などを學んでおたが、だんだん、ひきあげら
れて、とーとー、そこの機關掛きかんがかりにまでなつた。

時計

すちぶんそんは、子どもものときから、たいそー、きよ
ーで、物のしかけなどをしらべることがすきであつ
た。それで、時計などは、いあいち、機械きかいをとりはづし
て、しかけをしらべたり、また、もとのとほりに、組み

立てたりしてゐた。それだから、となりのうちなどで時計がくるふと、すぐにすちぶんそんのところに、持て行つて、なほしてもらつてゐた。

すちぶんそんは、石炭坑せきたんこうにやとはれた後、蒸氣じょうきぽんぶを扱つてゐたこともあつたが、そのときにも前に時計のしかけをしらべたよーに、その蒸氣じょうきぽんぶのしかけをしらべた。それで、その機械きかがそんじて、そこらに居る人では、なほすことのできんので、すちぶんそんに見せると、すぐ、なほすことができた。

第十一課

じょーじすちぶんそん。

(二)

幾

前に、いったよーに、すちぶんそんは、ほかの人には、で
 きんことでも、じぶんには、できるところから、これ
 まで、ひとが、工夫して、みて、できなんだものを、じぶ
 んで、工夫して、みよう。』と思った。それは、蒸氣機關きかんで、荷
 物をはやく、運ぶことのできる機械きかいのことであつた。
 この機械きかいは、これまで、工夫して、みたものが、幾人も、
 あつたが、誰にも、できなんだのである。やうやう、工夫
 して、作つて、みて、動かすと、こはれたり、また、すこし
 も、動かさなだりしたのである。ただ、すこし、みこみ
 のあつたのは、齒車はぐるまを、齒はのついで、るれーるの上で、

走

走らせる工夫であつた。しかし、これも、たいそー、速度
がおそいので、あまり、やくにたつたなつたのである。
そこで、すちぶんそんは、はじめて、すべりのよい車
を、すべりのよいれーるの上で、走らせる工夫をし
た。

その工夫は、みごとくに、できあがつた。

その後、いぎりすの、ある地方で、荷物を運ぶために、
すちぶんそんの工夫した鐵道をしかうといふこ
とになつて、すちぶんそんは、高い給金きゅうきんで、その機き關かん師し
に、やとははれた。

にやとはれた

高讀一

高讀一

見

いよいよ、その鐵道の通じたときには、人がおほぜい、見物に出た。中には、かちで、競走きょうそしようとして待ちかまへてゐるものもあり、また馬に乗って、競走きょうそしようとして待ちかまへてゐるものもあつた。

やがて、すちぶんそんは機關車きかんしゃを運轉うんてんしはじめた。かちの人も、馬に乗ってゐる人も競走きょうそしはじめた。ところが、すちぶんそんが、一時間十五まいるの速度そくどで、走らせたから、かちの人も、馬に乗ってゐる人も、すぐ、あとになつてしまった。見物に出た人は、その速度そくどのはやいのと、勢のすさまじいのとに、おどろかんも

各

のはなかつた。

これからだんだん、いざりすの各地方をはじめとして、他の國國でも、旅客や荷物などを運ぶために、鐵道をしくよーになつた。

かういふ、便利を鐵道を工夫した、すちぶんそのんてがらは、まことに、たいしたものではないか。

第十二課

日本武尊の川上梟帥征伐。

勇壯

日本武尊は景行天皇の皇子にして、うまれつき、勇壯におはしけり。このころ、くまそのかしら、川上梟帥といふもの、天皇の仰に従ひたてまつらずして、

師といふもの天皇の位に依りてたてまつりし

高讀一

高讀一

はなはだぶれいなりければ、天皇尊みことをして、これを
うたしめたまへり。

重

尊みこと梟帥たけけるの家いにいたりて、見たまふに、兵卒ども、家の
まはりを、三重にとりかこみ、はなはだ、堅固けんごに、守り

おたり。尊みことはいかにすべきか。と、あんどたまひしが、
そのとき、梟帥たけけるは、あらたに、別室べつしつをつくり、その祝せ

衣服

んとて、親類しんるいなど、多く、集めて、さかもりせり。尊みことすな
はち、かみをときて、うしろにたれ、女の衣服を着、短たん

刀とを、ふところにかくし、多くの女にまじりて、梟帥たけける
の室しつに入りたまへり。梟帥たけけるは、男なりとは、すこしも、

知らずしきりに、さかづきをさして、尊みことに酒を飲ませなどしけり。

夜は、やうやくふけたり。人はわが家に歸りたり。梟たけ帥るは、急ひてたふれたり。

尊みことは、これを見て、大いに喜び、ただちにふところの短たん刀とを出して、その胸むねをさしたまへり。つねの人ならば、ただ「あ」とさけびて、息たゆべし。されど、梟帥たけはごゝのものなり。大聲に、尊みことを呼びて、「しばらく、待ちたまへ。君は何人にておはするぞ」といへり。尊みことは、さす手をゆるめて、「われは今の天皇の皇子、や

無礼

奉

まとをぐなといふものなり。なんぢ、わが天皇に従
 ひまつらずして、はなはだ無礼なれば、天皇われを
 してうたしめたまふなり。』とのたまへり。尊は、これ
 まで、やまとをぐなとなのりたまひたりしなり。
 梟帥たけるは、これを聞きて、大いに恐れ、ことばを改めて、
 『筑紫つくしには、われより、強きものはなし。されば、みづか
 ら、梟帥たけると稱しやうしたり。しかるに、やまとの國には、われ
 より、強き人もおはしけり。われ、君に、御名を奉らん。
 今より後は、やまとたけるのみことと申したてま
 つるべし。』といひて、息たえたり。これより、人みな、曰やま

高讀一

高讀一

本武尊とたけるのみことと申したてまつれり。

第十三課

足尾銅山。

足尾銅山ハ日光ノ西南ニアリ。今ヨリ二百九十餘年前ニ、コノ地ノ農夫ノハジメテ、發見シタルモノナリトイフ。

銅

方法

コノ銅山ハ、ソノコロヨリ、銅ヲ産スルコト多クシテ江戸城東照宮ナドニ用ヒタル銅ハ、タイテイ、コノ銅山ヨリ、産シタルモノナリトイフ。サレド、ソノコロニハ、銅ヲホリ取ル方法、コレヲフキワクル機キ械カイナド、ナホ、ジューブブンナラザリシカバ、人手ノミ、多

西洋

ク、カカリテ、ソノ産スルタカハ、ワリアヒニ、スクナ
カリキ。

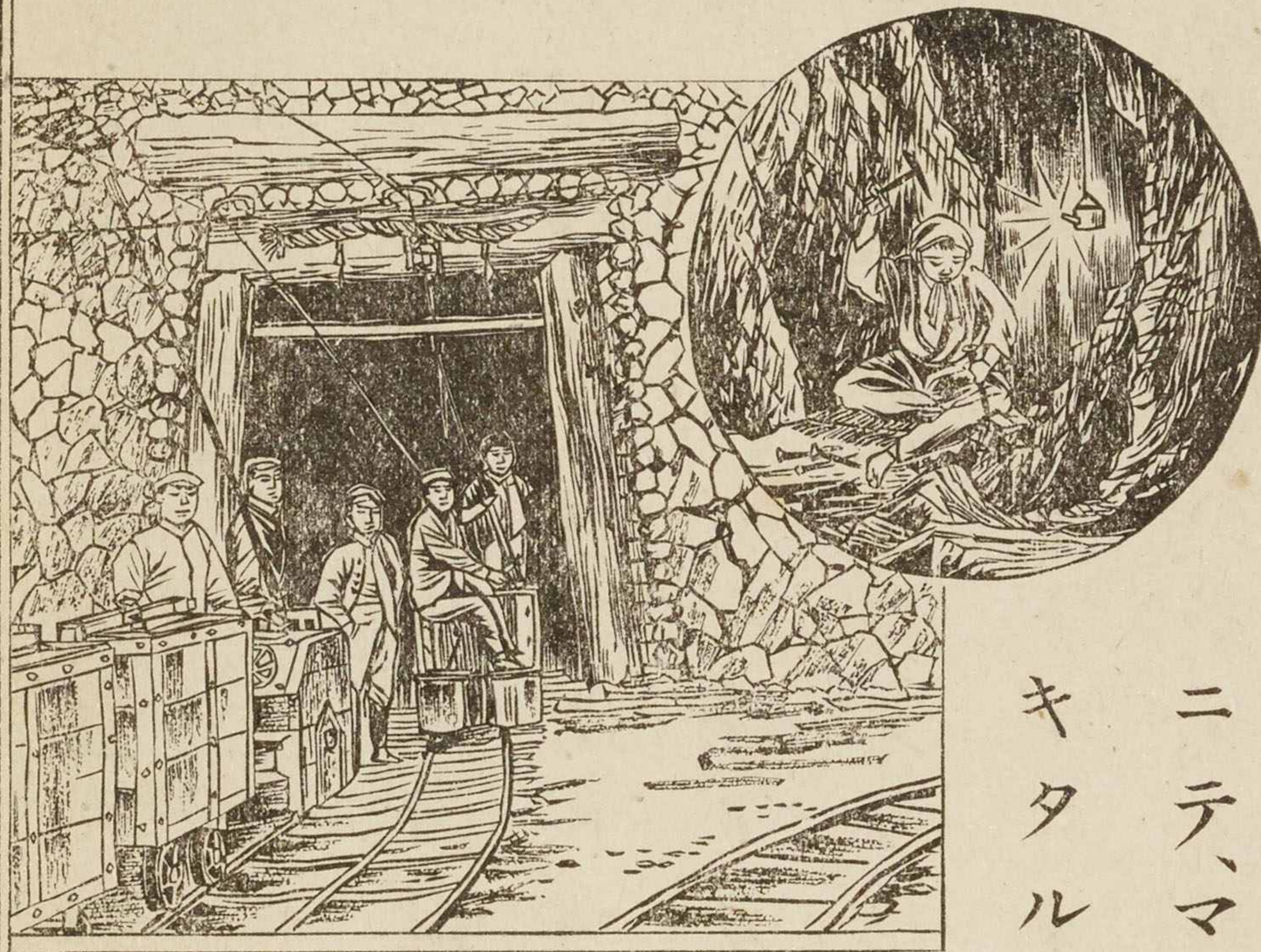
シカルニ、オヨソ、二十年前ヨリ、西洋諸國ニ用ヒラ
ルル種種ノ、便利ナル方法、機械キカイナドヲ用アルコト
トナリタレバ、人手ノカカルコトハ、ニハカニ、スク
ナクナリ、産スルタカハ、非常ニ、多クナリテ、世界屈クツ
指ノ大銅山トナルニイタレリ。

コノ銅山ニハ、數箇スベノ坑道コウダウアリ。ソノ中ニモ、マタ、タ
テニ、ヨコニ、多クノ坑道コウダウアリ。三千人バカリノ坑夫コウフ
ハ、ソノ中ニ入りテ、カンテラヲツルシ、金槌カナヅチトタガ

掘

ネトヲ持チテ、銅鑛ヲ掘リ取ル。
コノ掘リ取リタル銅鑛ハ、アルヒハ、電氣ノシカケ

ニテ、マキ上ゲ、アルヒハ、坑内ニ、シ
キタルレールニテ、坑外ニ、運ビテ、



コレヲ選鑛場トイフ所
ニ送ル。選鑛場ニハ、種
ノオホジカケノ機械アリ、
リ、マタ、多クノ女エアリ
テ、イチイチ、ソノヨキモ
ノト、アシキモノトヲエ

高讀一

高讀一

リ
ワ
ク。

リワク。

カク、エリワケタルモノハ、マタ、コレヲ製煉場セイレンジョウトイ

フ所ニ送ル。製煉場セイレンジョウニハ、コトニ、オホジカケノ機械キカイ

アリテ、焼キ、カツ、トカシテ、銅鑛ドウコウヨリ、銅ヲフキワク。

カクテ、マガリモノナキ、銅ハ、ハジメテ、製セララル

ナリ。

コノ銅山ノカタハラニ、足尾町アシヲアリ。足尾町アシヲハ、モト、

山間ノ、サビシキ村ナリシガ、カク、鑛業コウギョウノ盛ニナリ

シタメニ、今ハ、人口、オヨソ、三萬ニ達シ、學校、病院、ソ

ノホカ、都會ニアルモノハ、ホトンド、ソナハラザル

人口

コトナキニイタレリ。銅山ノ盛ナルコト、コレニテモ、オシハカルベシ。

第十四課 地中の話。

ある日、教師は、一人の生徒と、地中のことにつきて、次のごとき問答をなしたり。

教師「なんぢは、われらが、つねに、ふめる土地の中より、いかなる大切なるものを産するかを知らるか。」

生徒「われは、すでに、石炭、石油などの、土地の中より、産するものなることを學びたり。また、かつて、種

屬

種の金屬、飾石、寶石なども産するものなることを聞きたることあり。」

教師「種種の金屬とはいかなるものをさすか。」

生徒「金、銀、銅、鐵、鉛、錫などなり。」

教師「しからは、飾石とは。」

生徒「水晶、めのーなどなり。」

教師「しかり。よく答へたり。しからは、寶石とは。」

生徒「知らず。」

教師「寶石とは金剛石、るびー、さふあいやなどなり。そ

のうち、金剛石は萬物中、もつとも、堅きものにして、

堅

高讀一

高讀一

有

よく、すきとほり、はなはだ、強きつやを有し、その
うへ、産すること、も、はなはだ、まれなれば、寶石中、
も、とも、貴きものといはるるなり。」

生徒「金剛石は、日本には、産せずや。」

教師「しかり。日本には、いまだ、見出されず。あふりか
の南部、南あめりかの東部、あじやの南部などに、
産す。」

生徒「師よ。われらの、つねに、飲める井の水は、土地の
中より、産するものといひえずや。」

教師「井の水、泉、温泉など、みな、土地の中より、産する

井 泉

岩

ものといひうべし。」

生徒「それらはいかにして、

土地の中に存するか。」

教師「雨水などの、土地の中

にしみこみて、ねばつち

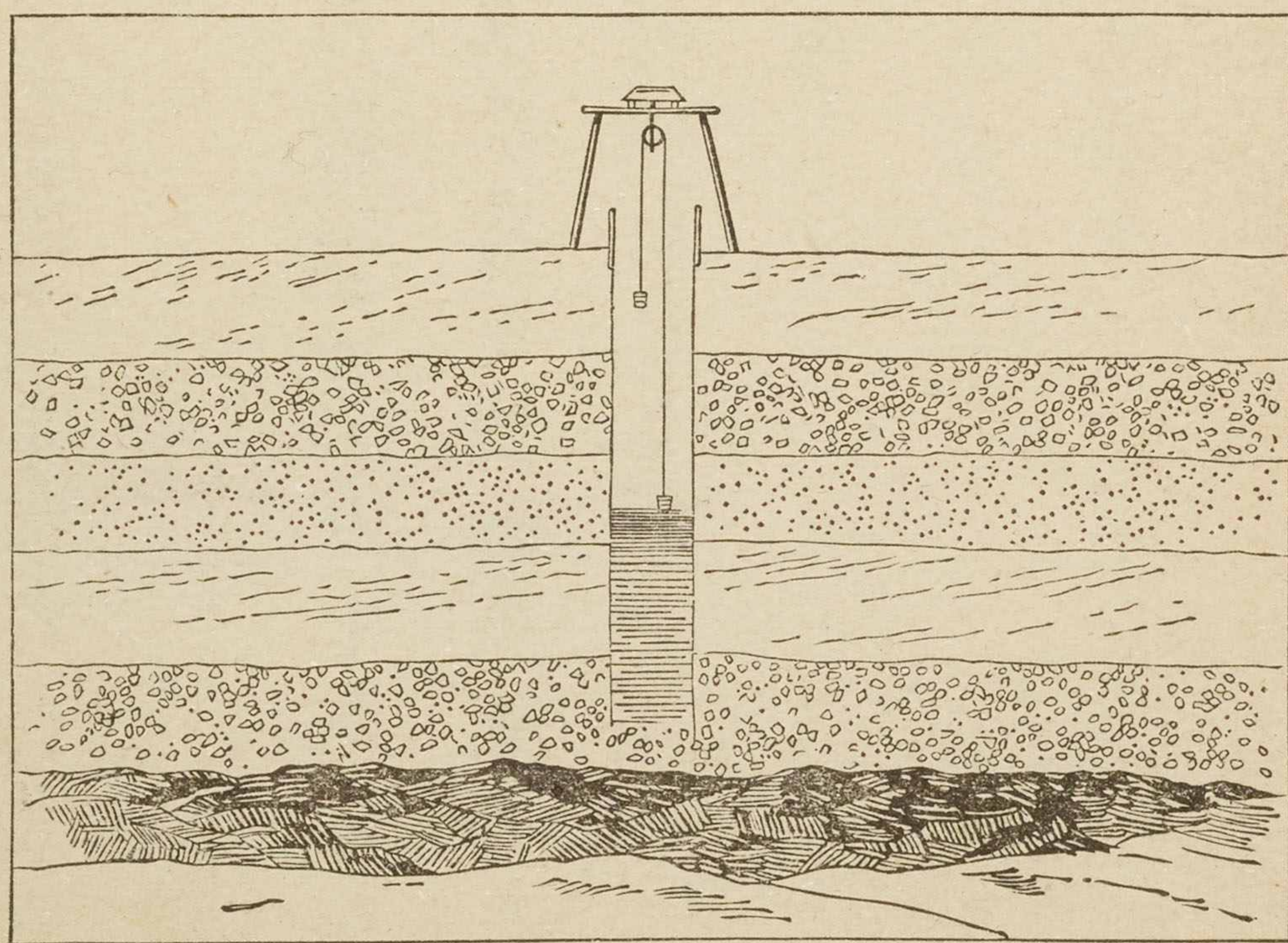
または、堅き岩の上に、た

まれるが井の水にして、

かく、しみこみて、たまれ

る水の、ふたたび、しぜん

に、じめんに、出づるが泉なり。また、温泉は、深く、土



内

地の中にしみこみたる水の、地熱ちねつといふ地球の内部にある熱ねつにあたためられて、ふたたびじめんに、出づるものなり。」

生徒「温泉は、何ゆゑに、諸種の病に、こゝのこゝあるか。」
教師「地中にあるとき、まはりにある、種種の、薬となるものをよゝかいせるがゆゑなり。」

第十五課 夏やすみ。

ことしの夏の休には、

山に、遊びて、歸り來ん。

松の木蔭かげに、休みては、

浴

貝

瀧たき見ることも樂よ。」

ことしの夏の体には、

海水浴もこころみん。

よせては、雪とちる波を、

ただ、あけくれの友として。」

からだきたふは山の道、

空氣のよきは海のそば。

花つみ集め、貝を取り、

知識ちしきひろむる益多し。」

いざ。いざ。行かん、この夏も。

父もろともに、母ともに。

かはれる里さとのならはしを

見聞みきこくもうれし、旅りをして。

第十六課 草香幡梭姫皇后。

草香幡梭くさかのほたひめ姫皇后こごごは雄略ゆうりやく天皇の皇后でございます。

ある日、天皇とごいっしょに、葛城山かつらぎに、かりに、お出でに

なりました。そのとき、大きな猪いのししが、にはかに、草の中

から、あれて出ましたから、かりうどなどは、たいそ

し、恐れて、みんな木に、上あってしまひました。

そこで、天皇は、おそばのものにむかって「あれをさし

逃

弓

とめよ。どんなに、あらいけものでも、人にあへば、たちとまるものだ。』と仰せになりました。おそばのもののも、おくびよものでございまして、たからまた、木に逃げ上つてしまひました。

猪いのししはいよいよ、あれまはつて、天皇をめぐけて来て、つきかからうとしました。天皇は、弓で、その猪いのししをおさへて、一息に、ふみころしておしまひになりました。さて、天皇は、おそばのものが、いくじなく、逃げたので、たいそ、御きげんがあるくて、そのものを呼び出して、きつてしまはうとなさいました。

皇后は、たいそしきのどくに、お思ひになつて、國のも
のは、みんな『陛下は、かりのよしな、あらいことばか
り、おすきでいらっしやる。』と申してをります。それに、い
ま、この猪おのししのためにおそばのものをおきりなされた
なら、國のものは、なんと申しませう。どうぞ、許して
やうてくださいます。』とおいさめになりました。

天皇は、いったい、どりよりの大きな御方でございまし
たから、すぐお許しになりました。そして、皇后とび
とつ車に乗つてお歸りになる途中で、『あし。かりに、出
るものは、鳥やけものばかりをえものにして、歸る

がわれは、けふはよいことばまでもえものにした。と仰せになつて、たいそし、御きげんよく、お歸りになりました。

第十七課

瓜生岩

瓜生岩は福島縣の人なり。若きとき、會津の醫師、それがしにつきて、讀書、裁縫、作法などを學び、かたはら、育兒の法を習ひたり。

かくて、十七歳のとき、會津藩士、瓜生氏に嫁ぎたりしが、よく、夫としうとしうとめとにつかへ、下男、下女をいたはり、もっぱら、家事をはげみたりしかば、家

下|夫

裁縫

のもの、みなむつみあひて、楽しくくくらしたりき。

しかるに、三十四歳のとき、その夫ふと、重き病にかかりて、つひに、この世よを去りたり。岩の悲はいかばかりなりしならん。されど、岩は、なみなみの女に、あらざりければ、いたづらに、なげくことなく、「女ながらも、國のため、君のためにつくさん。」と決心せり。

決心
父母

岩は慈愛じあいの心、きはめて、深く、つねに、思へるよ―世よにあはれなるもの多けれども、をさなきときに、父母をうしなへるもの、貧しき家に生れて、衣食に、困れるものほど、あはれなるはなし。と思ひたり。すな

はち、近き村村の、かかる兒童じどを集めて、これを養ひ、

數

はち、近き村村の、かかる兒童を集めて、これを養ひ、衣食を與ふることより、學問、てわざを教ふることにいたるまで、心を用ふることわが子にことなることなかりき。かく、すること十數年にして、そのめぐみを受けて、みづから、せいかつするにいたれるもの百人以上におよべりといふ。

岩は、その後、今の福島町に、養育會をまうけ、ますますはげみて、多くの兒童を養育したり。かくて、その慈善の行しだいに、世に、聞えければ、明治二十四年、東京養育院は、皇后陛下の御内意を受けて、岩をま

生

ねきたり。岩はそのありがたさに、感じて、ただちに、東京養育院（よやくいん）に入りて、その世話掛長（せわがかりちよ）となりたり。かくて、三年の間、ねしんに、その職（しやく）をつとめたりしが、ゆるぎありて、生國に歸りたり。

岩の歸りたるよくねんかの明治二十七八年戦役（せんえき）は、おこりたり。岩は、女の身にかゝるだけの忠義は、つくさん。』と思ひて、種種、かんがへおたりしが、わが軍人の、遼東半島（りょうとうはんとう）の雪に、なやめるよしを聞きて、一種の雪ぐつを工夫したり。かくて、諸方をめぐりて、その費用（ひよう）をつのり、數萬の雪ぐつを作りて、これを、

その費用を... 妻高の雪く... 作... 木...

恤兵部じゆうべいぶに、けんじたり。

貴婦人

このころ、皇后陛下は、多くの貴婦人たちと、ほーた
いを作りたまひて、これを戦時病院せんじびやういんに送りたまひ

下

しが、あまたのくづを生じたれば、これを岩に下し
たまひたり。岩は、大いに、そのありがたさに、感じて、

深

このくづを織りて、小さきはたを作り、皇后陛下の
御歌を深め出して、戦死せるものの家族かぞくなどにお
くりたり。

岩の善行、かくのごとく、多かりしかば、明治二十九
年、藍綬褒章らんじゆうほうしやうをさづけたまひたり。

岩は、明治三十二年、六十九歳にて、この世よを去りしが、岩の行をしたへるもの、あひはかりて、その銅像どうぞうを、浅草あさくさ公園にたてたり。

第十八課 富士登山フジサン (一)

消

富士山フジサンニノボルハ夏ノ盛ヲヨシトス。コノコロハ、山上ノ雪、タイテイ、消エ、寒サモ、サホド、キビシカラネバナリ。

登山トサンスルニ、五ツノ道アリ。イヅレモ、チョージョーマデノ間又、十段ダンニ、分チテ、コレヲ一合目、二合目ナドト呼ベリ。一合目ゴトニ、小屋アリ。登山トサンスル人ノ休憩キヤクタイ

高讀一

高讀一

スル所ナリ。

登山トザンスルニハ、マヅ、フモトニテ、ワラヂ五六足ト綿

入トベントトトヲ用意シ、コレヲゴーリキトイフ

人夫ニセオハセ、オノレハ、金剛コング杖ヲツキテ、ミガ

ニ、出デ立ツベシ。金剛コング杖トハ白木ヲ、八角ニ、ケツリ

タル杖ニシテ、登山トザンスルモノノ、カナラズ、タヅサフ

ルナラハシトナレルモノナリ。

カクテ、ゴーリキニ案内アノイセラレテ、ノボリ行ケバ、ハ

ジメノウチハ、道、ヤヤ、平カニ、ホカゲモ多クシテ、サ

マデ、困難ナラザレドモ、ヤウヤクノボルニシタガ

積

ヒテ、道ハケハシク、草木ハ小サク、ツヒニハ、マツタク、
草木ナキ岩山トナリテ、歩行ハナハダ、困難ナリ。

コノアタリハ、風ハゲシケレバ、小屋ハ、ミナ、石ヲ積
ミカサネテ、ツクレリ。登山スルモノハ、多ク、ココニ
タチヨリテ、水ヲモトム。ソノ水ハ、小屋ノ主人ガ、遠
キ谷間ヨリ、取り來リタル雪ヲトカシタルモノナ
リ。

呼吸

カクテ、ノボリノボリテ、七合目ノアタリニイタレ
バ、道ハ、マスマス、ケハシク、歩行ハ、イヨイヨ、困難ト
ナル。コトニ、空氣、シダイニ、キハクトナレバ、呼吸モ

苦シク、ドーキモハゲシク、ハテハ、五歩行キテハ、休
 ミ、十歩行キテハ、休ミテ、タダ、金剛杖ニタヨリテ、ノ
 ボルニイタル。コノトキ、八合目ノ小屋、目ノ前ニ、見
 エテ、シカモ、ヨーイニ、達シガタク、モドカシキコト
 限ナシ。八合目ノ小屋ハ、朝、フモトヲタチタルモノ
 ノ、タイテイ、宿ル所ナリ。

第十九課 富士登山。(二)

ヤウヤクニシテ、八合目ノ小屋ニ着キテ、宿ル。寒サ
 ハゲシケレバ、ゴーリキニセオハセキタレル綿入
 ヲ着、タキビシテ、寒サヲシノグ。サレド、空氣キハク

飯

ナレバ、火モ、ヨクハ、モエズ。ヤガテ、ユフハンノ用意
デキテ、ハシヲ取レバ、飯ナマニエニシテ、味ナク、ネ
ドコニ入レバ、呼吸ツマリテ、ヨク、ネムルコトアタ
ハズ。ハゲシキ風砂ヲ吹き來リテ、戸ヲウツ音モノ
スゴシ。

太陽

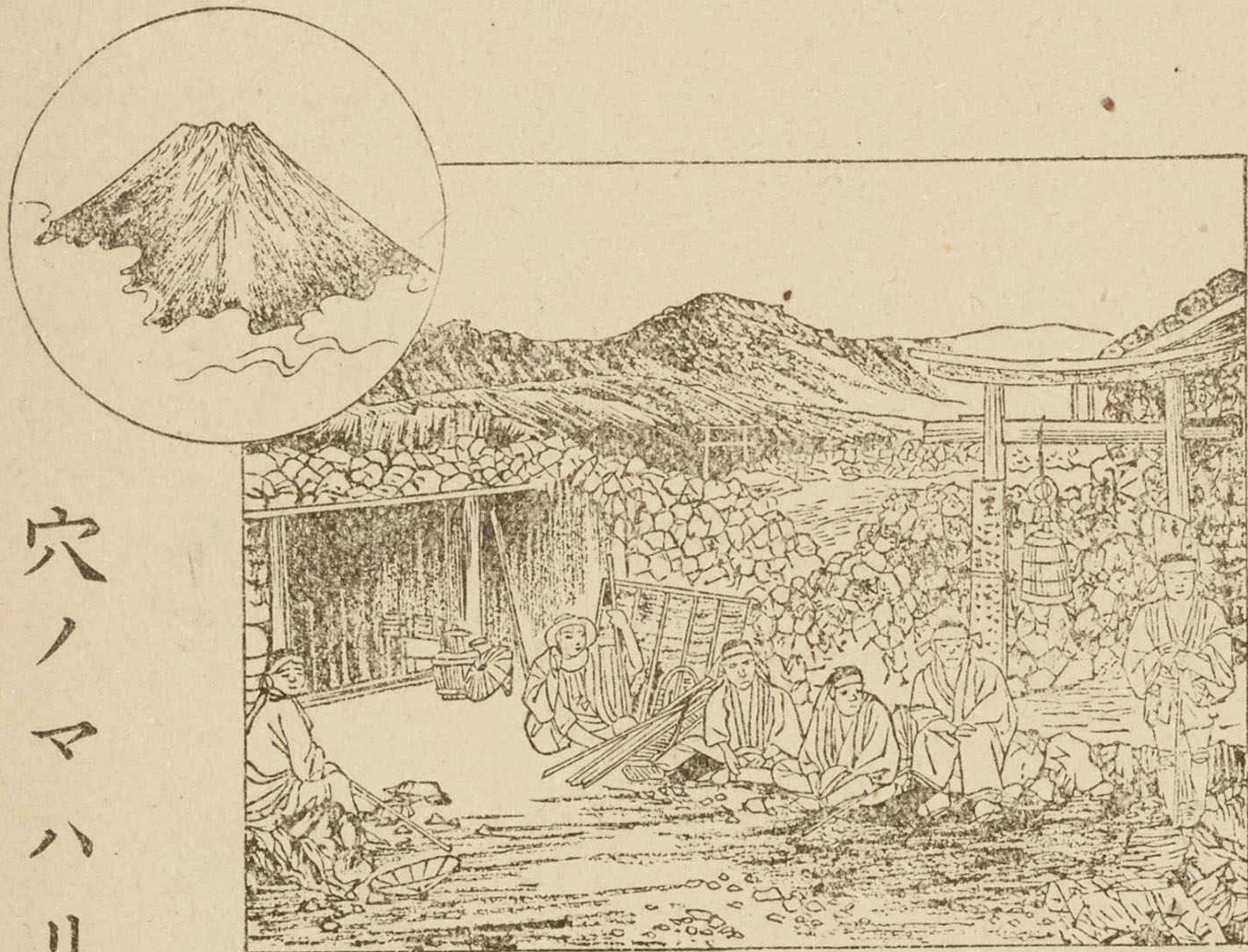
東ノ方、ヤヤ、白ムコロ、オキ出ヅレバ、雲ノ色、アルヒ
ハ、紫ムラサキトナリ、アルヒハ、黄トナリ、紅クレナキトナリテ、美シキ
コトイハンカタナシ。目ノ下ニ、見オロス山、川、海ノ
景色ケシキ、ヤヤ、アキラカニナリテ、真紅シンクノ太陽ハ、ヤウヤ
ク、ノボル。ソノ大イサ、ヘイゼイ、見ルモノニ數倍セ

高讀一

高讀一

切

リ。太陽ノ光キラキラト、カガヤクニイタレバ、天地、
マツタクアケワタル。



穴ノマハリニハ、ユゲヲ出ス所アリ。マ

コノ景色ヲ見ツツ、ノボリ
行ケバ、一時間バカリニシ
テ、チョージョーニ達ス。チョージョ
ーニハ、大イナル穴アリ。昔、
噴火シタリシ跡ニシテ、切
リタテタルゴトキ岩コレ
ヲカコミ、中ニハ、雪積レリ。

窓 下 | 輕

夕、金明水、銀明水トイフ、二ツノ泉アリ。ソノ水ハ雪
ノトケタルガシミ出ヅルモノナルベシトイフ。
穴ヲ一周シテ、下山ス。下山スルトキニハ、足ハナハ
ダ、輕クシテ、登山ノトキノゴトキ苦勞ナシ。一日ア
マリニシテ、ノボリタル所ヲ、半日ナラズシテ下ル。
タダワラヂエ多クフミヤブルコトアルノミ。

汽車の窓よりあふぎ見る

富士のすがたのけだかさよ。

雲より上にぬけ出でて、

いつも、たかねの雪白し。

船のへさきにながめやる

富士^{ふじ}のけしきのおもしろや。

さかさに、うつるうなばらの

かげは、急よりも、たくみにて。

山は、世界に、多けれど、

形のよきは、この山ぞ。

春のかすみのたつあした、

秋の入日のさす夕べ。

第二十課 運動。

あるかねもちのうち、ひとりの男の子があつた。た

御飯

いそし、あがままもので、御飯のときに、うまい、めづらしい食物がないと、いつでも、ぐづぐづ、いつて、うちものものを困らせておた。それに、運動がきらひで、顔の色もあるく、からだもやせておた。父母は、いつも、これをしんばいして、「どうかして、そのあがままをなほしたいものだ。また、からだをじょぶにさせたものだ。」と思つておた。

ある日、父はその子呼んで、「げふは、散歩に、つれて行かう。そして、歸つて來たら、御ちそしをしませう。」と、いった。その子は、これを聞いて、たいそし、喜んだ。

鳴

お晝すぎから父はその子をつれて、散歩に出かけて、人家をはなれた野原に出た。そこは、空気が清くて、こころもちのよいうへに、木に、鳥が鳴いておたり、所所に、きれいな草花がさいておたり、また、とんぼなどがとんでおたりして、まことに、楽しい所であつた。

追

そこで、父は、その子に草花を折らせたり、とんぼなどを追はせたりして、ながく、遊ばせておた。しかし、その子は、ときどき御ちそーのことを思ひ出しては、なんべんか、父に「歸らうではありませんか。」とい

疲

た。

父は、いろいろいとすかして、できるだけその子に運動させた。そして、やうやう日のくれかかるところに、歸つて來た。その子は、もうさつきから、足も疲れ、はらも、たいそー、つてゐたので、歸ると、すぐに、御ちそーを、さいそくした。

しばらくすると、母が御膳おぜんを出した。こどもは、「どんな、うまいものがあるか。」と思つて、御膳おぜんの上を見ると、いつものよーなものばかりで、べつに、かはった御ちそーはない。

食

そこで、その子は、またぐづぐづいひだした。母は「ま
 ー。食べてごらん。きつと、いつものよりはおいしいか
 ら。」といった。その子は、ぐづぐづいひながら、食べてみ
 た。ところが、母の「いたとほりに、どれも、たいそー、う
 まかった。」

その子は、ふしぎに思つて「どうしたのでございませ
 う。いつものよーなたべものも、けふは、たいそーお
 いしうございます。」といった。父は「それは、けふは、運動
 して、はらが、つておるからです。おまへは、ふだんは、
 運動をせず、に、御飯を食べるから、どんなものを食

べても、うまくならないのです。いつも、かういふよーに、
うまく、たべようと思ふなら、これから、いつもよく、
運動せねばなりません。」と教へた。

その子は、これを聞いて、これまでのわがままであつたことをこーかいした。そして、それから、學校でも、うちでも、よく、運動するよーになつて、顔の色もよくなり、からだもこえてくるよーになつた。

をはり。

72428

国立国語研究所



1000605442

明治三十六年十月廿六日 印刷
 明治三十六年十月廿七日 發行
 明治三十八年十一月廿五日 翻刻印刷
 明治三十八年十二月十五日 翻刻發行

著作權所有

明治三十八年十二月十五日
 文部省檢査濟

發賣所

高等小學讀本一

定價金七錢五厘

著作兼發行所 文部省

翻刻者 大橋新太郎

印刷者 愛敬利世

印刷所 博文館印刷所

發行所 博文館

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

株式會社 國定教科書共同販賣所

東京市日本橋區本町三丁目八番地

東京市小石川區久堅町百〇八番地

東京市日本橋區本町三丁目八番地

高讀一

0. 0

24